

情報判断における情報の内容とメディアの効果—老年期について

吉村 啓子・吉村 英

The Effects of Media on Older Adults: A Comparison of Vocal Information and Printed Information

Keiko YOSHIMURA, Masaru YOSHIMURA

I 問題

本研究の目的は、同一の内容をもつ音声情報と文字情報がメディアの違いによってどの程度異なる評価を受けるのかを実験的に検討することにある。特にここでは、情報の受け手の年齢と情報の内容との関連を中心に、メディアの効果について検討を行う。

現在われわれはさまざまなメディアを通していろいろな情報を受け取っている。情報化社会の進展とともに、情報の伝達手段は多様化し、同一の内容をもつ情報がさまざまな形態で伝えられる場合も多くなっている。情報の形態には、音声、映像、紙などに書かれた文字などがあり、それぞれにもっている特性が異なっている。まず、繰り返しその情報を確かめられるかどうかである。音声や映像の場合、送り手の都合が優先され、受け手はその情報をもう一度確かめたいと思っても、反復提示されるとは限らない。紙などに書かれた文字化された情報の場合、受け手は何度もその内容を確認することができる。次に、人間が直接介在するかどうかである。音声や映像の場合、誰かの肉声によって伝えられ、その声の様子なども情報として付け加わる可能性がある。それに対して、文字の場合は、書き手の存在はあるものの、受け手がその情報を読むときには現実の人間が介在することはない。このように情報の形態によって持っている特徴が違うということは、同じ内容の情報であっても、メディアが違えば、その情報は異なった評価を受ける可能性が考えられる。

また、発信される内容も、メディアの効果と密接な関係をもっていると考えられる。日ごろ発信されてい

る情報の種類には、政治情報、経済情報、スポーツ情報、文化情報、災害情報等、多様なものが考えられる。それぞれの情報は難易度が異なるだけでなく、好ましきなども異なる。また、受け手が全ての情報に対して同じ程度の興味・関心を持っているというわけではない。情報の内容によって、メディアの効果が変わる可能性も考えられる。

このような問題に対してすでに吉村・吉村・大平(1997)は、経済情報、文化情報、災害情報の3種類の情報について、文字を媒介として提示した条件と音声を媒介として提示した条件とを設け、青年期の人々を対象とした実験検討を行っている。その結果、わかりやすさの項目、信頼性の項目、明確性の項目、感性的評価の項目の4項目について提示方法によって印象が有意に異なっていることを、各情報が持っている性格の違いから検討を加えている。

わかりやすさの項目では、経済情報と災害情報はメディア間に有意差は見られなかったが、文化情報は音声で提示されるよりも文字で提示される方がわかりやすいと評価されている。信頼性の項目では、経済情報と災害情報は文字よりも音声で提示される方が信頼性があると評価されたが、文化情報はメディア間に有意差は見られなかった。明確性の項目では、経済情報は、文字よりも音声で提示される方が明確であると評価されるが、文化情報と災害情報はメディア間に有意差はみられなかった。感性的評価の項目では、音声よりも文字の方が、ポジティブなものはよりポジティブに、ネガティブなものはよりネガティブに評価された。経済情報はメディア間に有意差はみられなかった。これらの結果は、同じ内容の情報であっても、音声によっ

て提示された場合と、文字によって提示された場合では、受け手は情報に対して異なる評価をすること、メディアによる影響は情報の種類によって異なるという事実を明らかにしている。

しかし情報を受け取っているのは青年期の人ばかりではない。老年期の人でも青年期の人と同じように情報を受け取っているが、老年期の人とは青年期の人とさまざまな面で異なっており、その違いが情報の判断に影響を与えている可能性も考えられる。

まず、身体的な面である。老年期になると青年期に比べて身体的な機能が劣ってくるのが一般的に知られている。視覚的にはいわゆる老眼となり、文字を読むのに不自由を感じるようになる。聴覚的には小さな音が聞こえにくくなる。また、Birren, Schaie, Abeles, Gatz, & Salthouse (2006 藤田・山本監訳、2008)によると、ワーキングメモリーも加齢によって悪くなるという現象が見られる。そのような加齢による身体的な変化は、情報判断にも何らかの影響を与えているはずである。

また、三浦・井上(2004)は興味・関心に関する13項目について、若年層・壮年層・老年層の3世代に対して調査検討しているが、「文化・歴史」の項目以外の12項目において、老年期の人と青年期の人では興味・関心のある項目が異なっていることを見出している。このような違いが見られるならば、情報の内容が情報判断に与える影響は老年期の人と青年期の人とは異なるのではないかと考えられる。

さらに、老年期の人が信頼するメディアは青年期の人とは異なる可能性が考えられる。1960年代まで、情報の伝達の中心は紙に書かれた文字であった。老年期の人とは人生の前半において、文字を書くことによって情報を伝え、書かれた文字から情報を得ることに慣れ親しんでいたはずである。逆に青年期の人とは生まれた時からテレビやラジオなどの音声情報に接する機会が多い。吉村ら(1997)の結果において、青年期の人とは慣れ親しんでいると考えられる音声情報に対して信頼を置いているということから、老年期の人にとって慣れたメディアである書かれた文字を媒介とした情報の方が、音声を媒介とした情報よりも信頼を置くのではないかと考えられる。

このように、老年期の人とは身体的な加齢変化に加え、好みのメディアや興味・関心が青年期の人とは異なる

と考えられる。しかし老年期の人について、同一の内容をもつ情報がメディアの違いによってどの程度異なる評価を受けるのかを実験的に検討するという先行研究は見当たらない。そこで、本研究では先の青年期の実験結果を踏まえ、老年期の人を対象に青年期で使った3種類の情報を用い、文字で提示した場合と音声で提示した場合の情報に対する印象の違いを調べるために実験を行った。

ここで改めて3種類の情報の特徴を考えてみたい。経済情報は難しい単語を含み、内容が難解である。文化情報は読みにくい単語もなく、内容は鳥の子育てという明るくほほえましいものである。災害情報は内容的には平易であるが、わかりにくい地名を多く含み緊迫したものである。

老年期の特徴、情報の特徴、メディアの特徴などから以下の作業仮説を立て、老年期の人とは情報をどのように評価するのかを調べるといふ探索的検討のために実験を行った。

[わかりやすさの項目]

仮説1 内容の平易な文化情報ではわかりやすさの評価にメディアの違いはないが、経済情報と災害情報は平易とはいえないため、音声による提示では、ワーキングメモリーへの負担が高いことから、文字情報の方が音声情報よりもわかりやすいと評価される。

[信頼性の項目]

仮説2 老年期の人への親しんできたメディアは新聞などの文字で書かれたものである。親しんだメディアに信頼をおくと考えられることから、全ての情報について音声による提示よりも、文字による提示の方が信頼性が高いと評価される。

[明確性の項目]

仮説3 文字情報では、何度も読み返して情報の内容を明確にすることができることから、全ての情報について音声による提示よりも、文字による提示の方が明確性が高いと評価される。

[感性的評価の項目]

仮説4 加齢とともに感性に変化が見られるとは考えにくい。青年期の結果と同様に、音声よりも文字の方が、ポジティブなものはよりにポジティブ、ネガティブなものはよりネガティブに評価され、内容が中立的な経済情報ではメディア間に有意差はみられない。

[関心の項目]

仮説5 老年期の人の生活世界は狭くなっていることを考えると、文化情報や災害情報に関心が高く、経済情報にはあまり関心がないのではないか。関心の高い内容については何度も読み返して反応できる文字情報の評価が高くなる。

II 方法

実験計画 メディアの要因と情報の内容の要因の2要因からなる2×3の実験計画である。ただし情報の内容の要因は repeated measure である。

実験参加者 兵庫県加古川市主催の老人大学受講生103名（男性39名、女性64名）。年齢幅は63歳～83歳、平均年齢は69.8歳。

刺激材料 1. 経済情報、2. 文化情報、3. 災害情報の3種類を用いた。内容は以下のとおりであるが、この材料は吉村ら（1997）と同じである。

1. 経済情報：アジア太平洋経済協力会議（APEC）は、4日、札幌市内のホテルで、関税の引き下げなど貿易や投資の自由化をどう進めるかを話し合う次官級会合を開きました。自由化の時期をめぐり、米政府は自由化優先分野などで各国が足並みを合わせる積極姿勢を求めたのに対し、アジア諸国からは消極的な意見が目立ちました。各国の次官級が自由化問題で議論するのは、福岡、シンガポールに次いで、札幌が三度目。札幌会合では、今年11月の大阪会議で示す自由化の「行動指針」に向けて、意見の調整を図っています。日本側は「この会合で議論を詰めた」としていますが、具体的な自由化の進め方については、米国やアジア諸国の間で意見に隔たりがあり、どう調整されるかが注目されています。

2. 文化情報：北海道釧路市動物園で4月下旬に卵からかえったシマフクロウが元気に育っています。6月19日に巣箱から出ているのが確認されましたが、その時、体長は約50cmで、目の周りは黒く、体は白いうぶ毛でおおわれていました。いまは、全体に灰色がかかった羽毛が生え、大きくなっています。7月の末には飛ぶ能力も身につくということです。飼育されている母鳥が卵を抱いて温め、かえったひなが育つ、というのは初めてのことです。推定21歳の母親ピーコは、木にとまっているひなを少し離れたところから見

守っています。夜、暗くなると、くちばしからくちばしへとピーコがひなにえさを与えているといいます。えさは魚のホッケやマウスなどです。

3. 災害情報：北陸信越地方を見舞った大雨により、長野県小谷村では道路が土砂崩れなどで寸断され、小谷温泉に約80人、姫川温泉周辺に約20人、北小谷村小学校周辺に約百人が取り残されました。長野県警や自衛隊などのヘリコプターが出動して、温泉客などを救出し、必要な物資を現地に届けています。同村では、昨日午後5時すぎから集中豪雨に見舞われ、電話も有線も寸断されたため、状況が把握できなかったのですが、今日になって無線で連絡がありました。県警のヘリが小谷村役場から食料などの物資を空輸しています。また、新潟県内でも、「陸の孤島」状態が続く長野県境の糸魚川市平岩地区の住民や付近の温泉旅館などに足止めされていた宿泊客らの救出活動が、早朝から同県警や自衛隊のヘリコプター計4機ではじまりました。

刺激提示方法 3つの刺激文を、文字条件では印刷し、音声条件では訓練を受けていない女性1名が朗読したものをテープに録音したものを使用した。

質問紙の構成 文字条件では、7枚からなる小冊子を用意した。1枚目には全般的な注意事項や記入方法についての説明が書かれている。2枚目、4枚目、6枚目には刺激文が印刷されており、3枚目、5枚目、7枚目にはそれぞれ21項目のSD形式の評定尺度（5段階）が印刷されている。この21項目はわかりやすさの項目、信頼性の項目、明確性の項目、感性的評価の項目、関心についての項目などからなっており、吉村ら（1997）が用いたものと同一である。音声条件では、9枚からなる小冊子を用意した。1枚目は文字条件と同様、全般的な注意事項や記入方法についての説明が書かれている。2枚目、5枚目、8枚目には、文字条件と同じ21項目のSD形式の評定尺度（5段階）がそれぞれ印刷されている。具体的には以下のとおりである。

- 1) 暗い—明るい
- 2) 感じがよい—感じがわるい
- 3) 簡単な—むずかしい
- 4) 快い—不快な
- 5) 信頼できる—信頼できない
- 6) 論理的である—論理的でない
- 7) うれしい—かなしい

- 8) まじめな—ふまじめな
- 9) はっきりした—ぼんやりした
- 10) 緊張した—のんびりした
- 11) 軽い—重い
- 12) まとまりのある—まとまりのない
- 13) 好感のもてる—好感のもてない
- 14) 説得力がある—説得力がない
- 15) 気持ちがよい—気持ちがわるい
- 16) ていねいな—いいかげんな
- 17) わかりやすい—わかりにくい
- 18) きちんとした—だらしない
- 19) 愉快的な—不愉快的な
- 20) 関心がある—関心がない
- 21) 感情的な—理性的な

3枚目、6枚目、9枚目にはそれぞれ18項目のSD形式の評定尺度（5段階）が印刷され、声の印象について問うている。4枚目、7枚目は白紙であり、刺激が提示されている際にそのページを開けさせる。

手続き 実験参加者を2つの条件に分け、一方には文字による刺激を、もう一方には音声による刺激を与えた。実験には静かな部屋を使用した。文字条件では、各自刺激文を2分間黙読し、1つの刺激文ごとに質問紙に答えさせた。21項目の記入を全員が済ませたのを確認した後、次のページに進ませた。音声条件では、1つの刺激を提示するごとに質問紙に回答させ、記入を確認してから次の刺激を提示した。どちらの条件も実験の所要時間は約20分であった。

Ⅲ 結果

21項目の評定値について、メディアの要因と情報の内容の2要因からなる2×3の分散分析を行った（SPSS17.0使用）。ただし、情報の内容の要因はrepeated measureである。

わかりやすさの項目

わかりやすさの項目の分散分析の結果、内容の主効果のみ有意であった（ $F(2,196) = 45.54, p < .01$ ）（図1）。主効果が有意であったので、Bonferoni法による多重比較を行った。その結果、文化情報と災害情報との間には有意な差はみられなかったが、経済情報は文化情報、災害情報よりも有意にわかりにくい（ $p < .01$ ）

と評価された。この結果仮説1は経済情報と災害情報については支持されなかったが、文化情報については支持された。また、情報の内容のわかりやすさに関する判断は、メディアによる違いはないが、情報の内容によってわかりやすさの判断は影響を受けることがわかった。

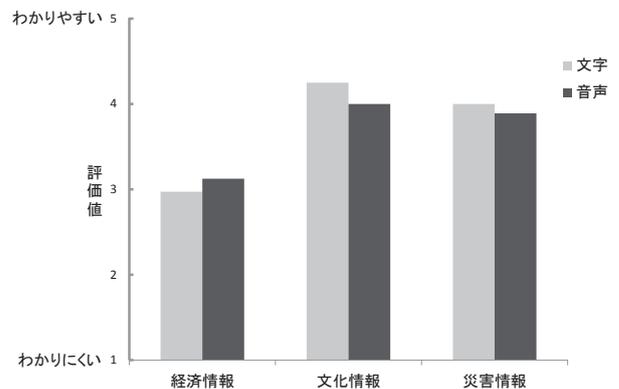


図1 「わかりやすさ」の評価値

信頼性の項目

信頼性の項目の分散分析の結果、内容の主効果のみ有意であった（ $F(2,190) = 30.76, p < .01$ ）（図2）。主効果が有意であったので、Bonferoni法による多重比較を行った。その結果、文化情報は経済情報、災害情報よりも信頼できると評価された（ $p < .01$ ）。また、災害情報は経済情報よりも信頼できる（ $p < .01$ ）と評価された。この結果仮説2は支持されなかった。老年期の人は、情報の内容によって信頼性についての評価を変えるが、それは音声で伝えられても文字で伝えられても同じであることが明らかとなった。

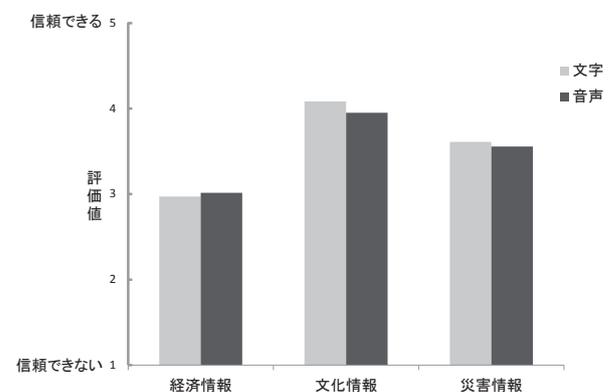


図2 「信頼性」の評価値

明確性の項目

明確性に関わると考えられる項目は、「はっきりした—ぼんやりした」、「きちんとした—だらしのない」の2項目である。それぞれについて分散分析を行った。「はっきりした」項目では、内容の主効果のみ有意 ($F(2,190) = 33.56, p < .01$) であった (図3)。主効果が有意であったので、Bonferoni法による多重比較を行った。その結果、文化情報は経済情報、災害情報よりもはっきりしていると評価された ($p < .01$)。また、災害情報は経済情報よりもはっきりしている ($p < .01$) と評価された。「きちんとした」項目では、内容の主効果のみ有意 ($F(2,190) = 19.10, p < .01$) であった (図4)。主効果が有意であったので、Bonferoni法による多重比較を行った。その結果、経済情報は文化情報、災害情報よりもだらしのないと評価された ($p < .01$)。また、文化情報と災害情報には有意差がみられなかった。この結果仮説3は支持されなかった。老年期の人は、情報の内容によって明確性についての評価を変えるが、それは音声で伝えられても文字で伝えられても同じであることが明らかとなった。

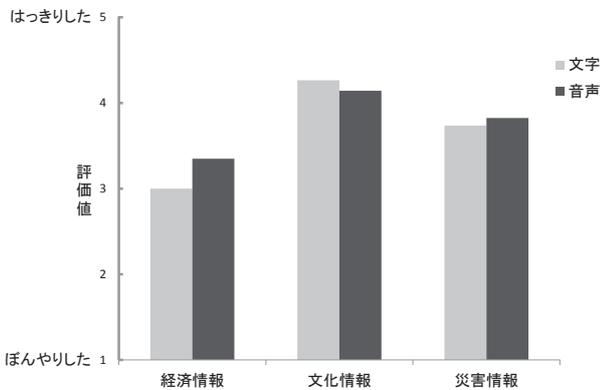


図3 「はっきりした」の評価値

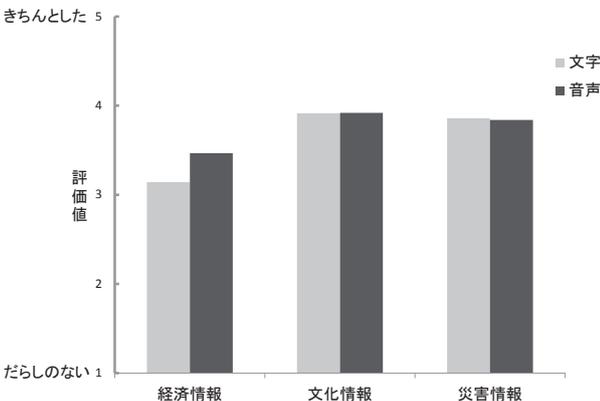


図4 「きちんとした」の評価値

感性的評価の項目

感性的評価に関わると考えられる項目は、「明るい—暗い」、「感じがよい—感じがわるい」、「快い—不快な」の3項目である。それぞれについて分散分析を行った。

「明るさ」の項目では、内容の主効果 ($F(2,168) = 42.49, p < .01$)、メディアの主効果 ($F(1,84) = 8.44, p < .01$)、メディア×内容の交互作用 ($F(2,168) = 3.38, p < .05$) が有意であった (図5)。交互作用が有意であったので単純主効果の検定と多重比較を行った。メディアの単純主効果については、経済情報、災害情報ではメディア間で有意差はみられなかった。文化情報では音声で提示されるよりも文字で提示される方が明るいと評価された ($F(1,84) = 17.39, p < .01$)。内容の単純主効果が有意であったので、それぞれ多重比較を行った。その結果、文字による提示の場合、経済情報と災害情報には有意差が見られないが、文化情報は経済情報よりも有意に明るく ($F(1,84) = 56.05, p < .01$)、災害情報よりも有意に明るい ($F(1,84) = 33.74, p < .01$) と判断された。音声で提示された場合も、経済情報と災害情報には有意差が見られないが、文化情報は経済情報よりも有意に明るく ($F(1,84) = 25.42, p < .01$)、災害情報よりも有意に明るい ($F(1,84) = 33.74, p < .01$) と判断された。

「感じのよさ」の項目では、内容の主効果 ($F(2,188) = 46.70, p < .01$)、メディア×内容の交互作用 ($F(2,188) = 3.46, p < .05$) が有意であった (図6)。交互作用が有意であったので単純主効果の検定と多重比較を行った。その結果、メディアの単純主効果については、文化情報では音声で提示されるよりも文字で提示される

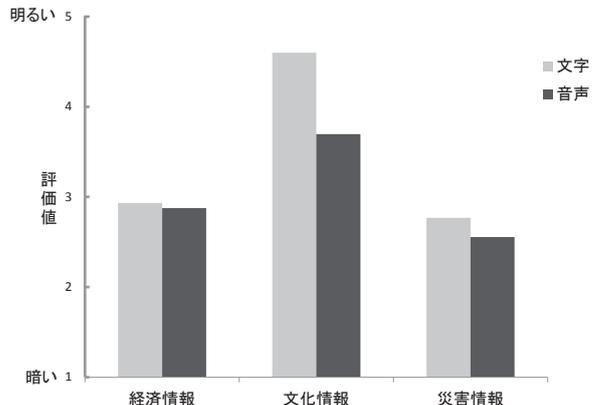


図5 「明るさ」の評価値

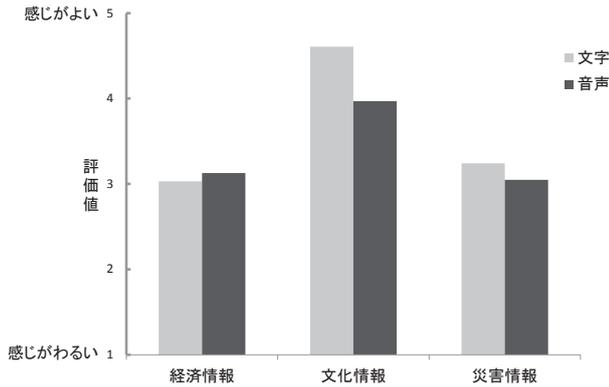


図6 「感じのよさ」の評価値

方が感じがよいと評価された ($F(1,94) = 11.53, p < .01$)。内容の単純主効果が有意であったのでそれぞれ多重比較を行った。文字で提示された場合、経済情報と災害情報では有意差は見られないが、文化情報は経済情報よりも有意に感じがよく ($F(1,94) = 69.72, p < .01$)、災害情報よりも有意に感じがよい ($F(1,94) = 29.10, p < .01$) と評価された。音声で提示された場合も経済情報と災害情報では有意差は見られないが、文化情報は経済情報よりも有意に感じがよく ($F(1,94) = 37.94, p < .01$)、災害情報よりも有意に感じがよい ($F(1,94) = 25.32, p < .01$) と評価された。

「快さ」の項目では、内容の主効果 ($F(2,198) = 51.69, p < .01$)、メディアの主効果 ($F(1,99) = 6.51, p < .05$)、メディア×内容の交互作用 ($F(2,198) = 5.66, p < .01$) が有意であった (図7)。交互作用が有意であったので、単純主効果の検定と多重比較を行った。その結果、メディアの単純主効果については、経済情報、災害情報ではメディア間で有意差はみられなかった。

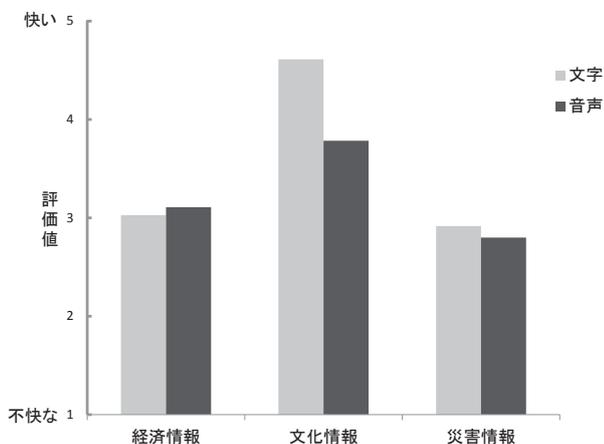


図7 「快さ」の評価値

文化情報では音声で提示されるよりも文字で提示される方が快いと評価された ($F(1,99) = 22.53, p < .01$)。内容の単純主効果が見られたのでそれぞれ多重比較を行った。文字で提示された場合、経済情報と災害情報では有意差は見られないが、文化情報は経済情報よりも有意に快く ($F(1,99) = 65.23, p < .01$)、災害情報よりも有意に快い ($F(1,99) = 46.81, p < .01$) と評価された。音声で提示された場合も経済情報と災害情報では有意差は見られないが、文化情報は経済情報よりも有意に快く ($F(1,99) = 21.53, p < .01$)、災害情報よりも有意に快い ($F(1,99) = 28.54, p < .01$) と評価された。

この結果ポジティブなもの (文化情報) についてのみ、メディアの効果があつたが、ネガティブなもの (災害情報) についてはメディアの効果はみられなかった。すなわち仮説4は一部支持された。

関心の項目

関心の項目の分散分析の結果、内容の主効果 ($F(2,200) = 28.22, p < .01$)、メディアの主効果 ($F(1,100) = 5.63, p < .05$)、メディア×内容の交互作用 ($F(2,200) = 5.46, p < .01$) が有意であった (図8)。交互作用が有意であったので、単純主効果の検定と多重比較を行った。その結果、メディアの単純主効果については、経済情報はメディアによる差はなかったが、文化情報では文字で提示される方が音声で提示されるよりも関心が高い ($F(1,100) = 10.21, p < .01$) と評価され、災害情報でも文字で提示される方が音声で提示されるよりも関心が高い ($F(1,100) = 6.78, p < .05$) と評価

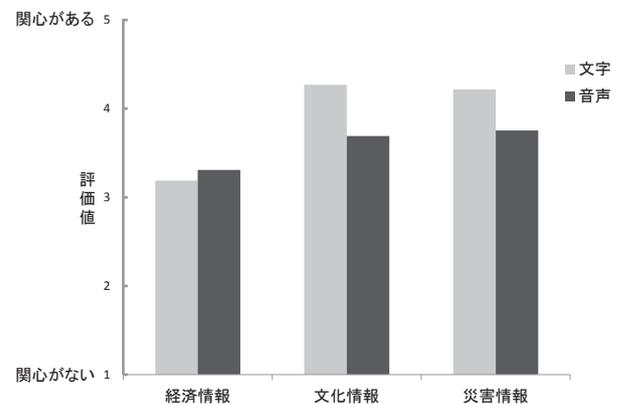


図8 「関心」の評価値

された。内容の単純主効果が有意であったので、それぞれ多重比較を行った。文字で提示された場合、文化情報と災害情報には有意差が見られなかったが、経済情報は文化情報よりも関心が低く ($F(1,100) = 32.24, p < .01$)、災害情報よりも関心が低い ($F(1,100) = 26.19, p < .01$) と評価された。音声で提示された場合も、文化情報と災害情報には有意差が見られなかったが、経済情報は文化情報よりも関心が低く ($F(1,100) = 7.17, p < .01$)、災害情報よりも関心が低い ($F(1,100) = 8.68, p < .01$) と評価された。この結果仮説5は支持された。

IV 考察

わかりやすさの項目

老年期の人にとって情報の提示の方法は「わかりやすさ」の判断に影響を与えていないことがわかる。この結果は、仮説1において、ワーキングメモリーに負担の高い音声情報は文字情報に比べてわかりにくいと判断されると考えたことに問題があるのではないだろうか。この実験は実際の理解度を測定するものではなく、「わかった気持ちの判断」である。本当にわかっているのかどうかを確かめる、記憶を必要とする理解度テストなどを行い、実験参加者がどれほどわかっているのかを自分で確認した後に、「わかりやすさ」の評定を行った場合には、結果は違ったものになるのではないかと考えられる。この点を検討するためには、何らかの理解度テストを課し、「わかりやすさ」の評定を行う必要がある。

また、災害情報は文化情報と比べてわかりやすさの印象に違いがなく、経済情報だけがこれら2つの情報に比べてわかりにくいと評価された。刺激文を選択する際、小谷村や糸魚川など読みの難しい地名を含む災害情報は、文化情報に比べて「わかりにくさ」を生むものであると仮定していた。しかし、老年期の人にとって地名の読みに「わかりにくさ」を感じなかったようである。老年期の人にとって、どのような単語が「わかりにくさ」を感じさせるのか、刺激となる単語や文章を吟味することも必要であることが示唆された。

信頼性の項目

老年期の人にとって情報の提示の方法は信頼性の判

断に影響を与えていないことがわかる。この結果は仮説2を支持していない。仮説において、老人が新聞などの文字媒体に触れることが多く、文字情報に信頼をおくと判断すると考えていた。しかし、実験では本物の新聞ではなく、普通の紙に書かれた刺激文でしかなかった。つまり、老年期の人がどのようなものであれば、紙に書かれたものであれば、信頼するというわけではないと考えられる。その点を確かめるためには、同じ文章の刺激を用い、新聞様に加工したものと、今回のような白い紙に印刷された物に対する信頼性に違いがあるかどうかを調べてみると良いのではないだろうか。音声についてもプロのアナウンサーが読み上げたニュースを使った場合と、訓練されていない人が読み上げた場合では信頼性に違いがあるのかどうか検討する必要がある。

また、文化情報は他の2つの情報よりも信頼できると判断されている。経済情報と災害情報は、その情報が信頼できるものであるか、できないものであるのかは重要な意味を持っている。経済情報は日本の経済の行方についてであり、その動向が生活に直結するものである。災害情報は災害の大きさや救助のいかんによっては人の生命に関わるものである。それに対して、文化情報は鳥の話であり、自分の生活や人の命に係わるものではない。つまりその情報が信頼できるものであるかどうかは重要ではない。したがってどのような提示方法であっても他の2つの情報よりも、軽い気持ちで「信頼できる」と判断するのではないだろうか。

明確性の項目

老年期の人にとって情報の提示方法は明確性の判断に影響を与えていないことがわかる。この結果は、文字情報では何度も読み返すことができるということを根拠に仮説3を立てたことに問題があるのではないかと考えられる。確かに文字情報は読み返しが可能であるが、実験場面では時間を区切って次々に読み進めることが求められるため、実験参加者は曖昧な情報を確認したいと考えていても読み返すことができない。情報の送り手の都合が優先される音声情報による提示条件とあまり変わらないことになっている可能性も考えられる。文字情報の特性である読み返して確認できる点を生かすには、自分のペースで自由に読み進める条

件を設け、統制された条件と比較してみる必要がある。

経済情報は他の2つの情報よりも明確性が低いととらえられている。刺激の中に、「意見の調整を図る」や「意見に隔たりがある」などの言葉があり、日本の経済の今後の姿が見えにくい。それによって他の刺激文に比べ、文章全体の明確性を下げているのではないかと思われる。また、災害情報では、「はっきりした」項目において文化情報よりも低く、経済情報よりも高くなっているが、文章の前半部分は災害の悲惨な状況が説明され、後半では「救出が始まり、物資の輸送が始まっている」とある。しかし、電話や有線の寸断など災害の詳細は不明で曖昧あるため、文化情報ほど明確性が感じられなかったのではないかと思われる。

感性的評価の項目

老年期の人の感性的判断は青年期の人のそれと同じであると考え、仮説4を立てた。ポジティブな文化情報については青年期の人と同様の反応であった。ではなぜ、災害情報のようなネガティブな情報については青年期の人とは違った反応になり、メディアによる違いが見られなかったのであろうか。その理由は2つ考えられる。一つは老年期の人は長い年月にいろいろな経験を積み重ねており、その過程ではいくつかの災害などにも直接的であれ、間接的であれ出会っている。そこでこのようなネガティブな情報に対して、青年期の人よりも耐性があり、文字で提示されたからと言って、大きくネガティブに反応しないのではないかと考えられる。今一つは、刺激文の最後の方に復旧の兆しが見え、評価する際にその点が印象に残り、近接性効果として暗い印象が薄れた可能性が考えられる。災害情報をネガティブな文章として位置付けていたが、このような明るさを含むものであったので、判断に揺らぎが生じ、メディアの特性が出なかった可能性も考えられる。方向性が全くネガティブな刺激文を考える必要がある。

関心の項目

老年期の人は、文化情報や災害情報に関心が高く、関心が高いものは、文字での提示によってより関心が高くなることがわかった。これは仮説5を支持しており、老年期の人が何に関心が高く、どのようなメディアを好んでいるのかを示す結果である。多くの老年期

の人は普段の生活において、関心のあることは紙などに書かれた文字情報から得ていることを示すものだとと思われる。

V まとめと今後の課題

本研究では、老年期の人が同一の内容をもつ音声情報と文字情報に対して、どの程度異なる評価をするのか検討することを目的として、経済情報、文化情報、災害情報を刺激文として5つの作業仮説を立て、探索的実験を行った。その結果、情報の判断にメディアの違いがあまりないことや、青年期の人とは情報に対する評価が異なっていることが見出された。心理学の多くの研究が青年期の人からデータを集め検討を行っており、老年期のデータがあまり見られないことから、この探索的検討は老年期の人の特徴や実験計画を考える上で、とても重要な知見を与えているものと思われる。

しかしながら、作業仮説が十分に支持されたとは言いがたい。そこで本実験で示された問題点について述べたい。

まず刺激文の選択である。難易度、明るさなどを勘案して3種類の刺激文を作っているが、結果と考察から刺激文の問題点が明確になり、刺激文の調整が必要であることがわかった。次に、実験場面と実生活上では刺激の提示のされ方が異なるということである。メディアの特性を生かすには実験場面が生活場面とかけ離れないようなもの、文字情報としては新聞を利用すること、音声情報としてはアナウンサーが読んだ情報を利用するような場面設定をすることが必要であることがわかった。そして「老年期」の定義と一般化に関するものである。現在、老人福祉法では65歳以上を「高齢者」としているが、何歳になれば「何ができなくなる」ということは一般化できず、老年期の人たちの個人差は青年期の人よりも大変大きい。本研究の実験協力者の方たちのように老人大学で学ぶ人もおられるれば、寝たきりに近い人たちも多数おられる。いろいろな状況の老年期の人のデータを収集したいと思うが、本実験のように一斉に実験実施できる場所や機会を見出すのは現実的にはとても難しい。勿論老人施設には多数の老年期の方がおられるが、実験への参加や実験場面の設定については多くの困難が伴う。今回の結果

はあくまでも元気で学ぶ人たちのデータであり、一般化することは危険である。サンプリングの問題が残っている。

引用文献

- 1) Birren, J. E., Schaie, K. W., Abeles, R. P., Gatz, M., & Salthouse, T. A. e. d. (2006) . *Handbook of Psychology of Aging 6th Edition*. Elsevier Academic Press.
(ピリン, J. E., シェイエ, K. W., アビールス, R. P., ガッツ, M. & ソルトハウス, T. A. 藤田綾子・山本浩一 (監訳) (2008). エイジング心理学ハンドブック 北大路書房)
- 2) 三浦梓・井上佳朗 (2004). 高齢者の生きがいに関する基礎的研究—高齢者の興味関心を通して—日本社会心理学会第 45 回大会発表論文集.
- 3) 吉村啓子・吉村英・大平曜子 (1997). 音声情報と文字情報の比較—情報の内容と受け手の性別の効果— 兵庫大学短期大学部研究集録, 29 集, 29 - 35.

参考文献

- 1) 原千恵子・中島智子 (2012). 老年心理学 培風館
- 2) 三浦綾子 (2012). 老年になる技術 海竜社
- 3) 竹原卓真 (2011). SPSS のススメ① 北大路書房

